



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2023年4月
第125号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（61）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（118）（山内 薫）	9
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	16
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記（木下和久）	23

漢点字の散歩(六十一)

岡田 健嗣



カナ文字は仮名文字(12)

二〇二一年度分として『萬葉集釋注』(伊藤博著、集英社)・全十巻の第十巻の漢点字版を、昨年(二〇二二年)三月に完成し、横浜市の中央図書館に納入し、全十巻を揃えることができました。

また、音訳版の『常用字解』(白川静著、平凡社)を、同六月に完成し、サピエ図書館に納入し、現在自由にダウンロードしていただけるようになっております。

もう一つ、『岩波古語辞典』(岩波書店)の漢点字版も、その完成が極間近となっております。

「万葉集」がどんな本であるか、今回のプロジェクトが完成するまでは、視覚障害者の間には、知る者は

いなかったということ、これによって初めて知らされたと言えます。

勿論「万葉集」の存在を知らない者は、日本人であれば探すことが困難なはず。その限りでは、視覚障害者の間には知る者はいなかったというのは、誠に暴言の誹りを免れないものがあります。しかし、「万葉集」を読んだことがあるかと聞かれれば、視覚障害者の中に「はい」と答えられる者がいるかと言えば、「いない」と答えるしかないはず。それは言うまでもなく、一般に流通している「万葉集」のテキストが、視覚障害者に読める形で提供されることが、これまでにはなかったことに他なりません。

こういうことを考えながら私は、この拙稿を書き継いで来たのですが、ここでこれまで触れて来た「万葉集」の詩歌文を整理してみたいと思います。

【雄略天皇】

一 籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岡

に 菓摘ます子 家告らせ 名告らさね そらみつ
大和の国は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて
我れこそ居れ 我れこそば 告らめ 家をも名をも
こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち こ
のをかに なつますこ いへのらせ なのらさね そ
らみつ やまとのくには おしなべて われこそをれ
しきなべて われこそをれ われこそば のらめ
いえをもなをも

【舒明天皇】

二

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山
登り立ち 国見をすれば 国原は けぶり立ち立つ
海原は かまめ立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和
の国
やまとはは むらやまあれど とりよろふ あめの
かぐやま のぼりたち くにみをすれば くにはらは
けぶりたちたつ うなはらは かまめたちたつ う
ましくにぞ あきづしま やまとのくに

【磐姫皇后（いはのひめのおほきさき）】
八五

君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行かむ
待ちにか待たむ

きみがゆき けながくなりぬ やまたづね むかへ
かゆかむ まちにかまたむ

八六

かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の 岩根しま
きて 死なましものを

かくばかり こひつつあらずは たかやまの いは
ねしまきて しなましものを

八七

ありつつも 君をば待たむ うち靡く 我が黒髪に
霜の置くまでに
ありつつも きみをばまたむ うちなびく わがく
ろかみに しみのおくまでに

八八

秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 いつへの方に

我が恋やまむ

あきのたの ほのうへにきらふ あさがすみ いつ

へのかたに あがこひやまむ

八九

居明かして 君をば待たむ * ぬばたまの 我が

黒髪に 霜は降るとも

ゐあかして きみをばまたむ ぬばたまの わがく

ろかみに しもはふるとも

九〇

君が行き 日長くなりぬ 山たづの 迎へを行かむ

待つには待たじ 「ここに山たづといふは、今の造

木（みやつこぎ）をいふ」

きみがゆき けながくなりぬ やまたづの むかへ

をゆかむ まつにはまたじ

【八田皇女（やたのひめみこ）】

四八四

一日こそ人も待ちよき 長き日を かく待たゆれば

有りかつましじ

ひとひこそ ひとまちよき ながきけを かくま

たゆれば ありかつましじ

【聖徳太子】

四一五

家ならば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせる こ

の旅人あはれ

いへならば いもがてまかむ くさまくら たびに

こやせる このたびとあはれ

【柿本人麻呂】

三六

やすみしし 我が大君の きこしめす 天の下に

国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と 御

心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱

太敷きませば ももしきの 大宮人は 舟並めて一朝
川渡る 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆることな
く この山の いや高知らず 水激く 滝の宮処は
見れど飽かぬかも

やすみしし わがおほきみの きこしめす あめの
したに くにはしも さはにあれども やまかはの
きよきかふちと みこころを よしののくにの はな
ぢらふ あきづののへに みやはしら ふとしきませ
ば ももしきの おほみやひとは ふねなめて あさ
かはわたる ふなぎほひ ゆふかはわたる このかは
の たゆることなく このやまの いやたかしらす
みなそそく たきのみやこは みれどあかぬかも

反歌

三七

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることな
く またかへり見む

みれどあかぬ よしののかはの とこなめの たゆ
ることなく またかへりみむ

「万葉集」の最初に置かれた一の歌は、雄略天皇の御製とされた御歌です。雄略天皇は第二十一代の天皇、五世紀後半に即位し、各地の豪族を平定して、強大な勢力を誇った天皇として知られています。「万葉集」の冒頭にこの雄略天皇の御製を置いたというのは、この集の編者の並々ならぬ覚悟と意志が示されているのではないのでしょうか。

二に置かれている歌は、舒明天皇の御製とされる御歌です。舒明天皇は、第三十四代の天皇で、在位は六二九〜六四一年、七世紀前半の天皇です。

舒明天皇の崩御の後、その皇后が即位して皇極天皇となり、四年後讓位して一旦退位して後に重祚して、齐明天皇として即位されました。このお二人の天皇が、齐明天皇の崩御後に即位された天智天皇、そしてその後には天皇とられた天武天皇のご両親であることを思えば、この舒明天皇は、「万葉集」の時代の皇統の祖と言うべき天皇であられて、三世紀遡った有力な天皇である雄略天皇の次にその御製を置くのが最もふさわしい天皇であると考えられたのも当然と言えるでしょう。

八五から九〇は、磐姫皇后の御歌とされる歌です。

磐姫皇后は、仁徳天皇の皇后でしたが、記紀の記述では、大変嫉妬深い女性で、天皇が八田皇女を皇宮に入れようとしていることを知って、山に籠もってしまつたというエピソードが語られています。

これらの歌は、難波（八田皇女の許）に出かけて中々帰つてこない夫である仁徳天皇へ、哀訴している歌です。記紀の記述とは、かなり質を異にした歌と言えます。左注によれば、最後の二首は、別の作者の歌であらうとも書かれています。

四七四は、その恋敵である八田皇女の歌です。八田皇女は、仁徳天皇の異母妹で、当時は母を異にすれば、兄妹でも結婚できたのです。八田皇女は、磐姫皇后が若くして亡くなられた後、皇宮に入り、皇后となられました。

仁徳天皇は第十六代の天皇で、応神天皇の第四皇子です。徳の厚い天皇で、疲弊した民を安んずるために、租税を三年間免除したと言われています。在位は五世紀前半です。

四一五は、聖徳太子の御歌と言われる歌です。聖徳

太子は十七条憲法を初めとして、大変事績の多い方です。とともに、大変徳の優れた方としても知られていました。この御歌は、旅人の死を悼んで歌われたものです。太子は、推古天皇の弟君で、天皇にはならぬままこの世を去つたと言われます。推古天皇の御代・六世紀末から七世紀前半に活躍されました。

三六と三七は、柿本人麻呂の長歌と反歌です。この歌は、持統天皇が吉野に行幸された折りに、それに供奉した人麻呂が作ったものと言われます。人麻呂のデビュー作とも言える作品です。

これらの歌の作者とされている人々を、年代順に並べてみますと、磐姫皇后・八田皇女（仁徳天皇）、雄略天皇、聖徳太子、舒明天皇、柿本人麻呂となります。そして一見して分かることは、雄略天皇の御歌と舒明天皇の御歌の二の歌の後は、見事な形式の短歌と、人麻呂の五・七のリズムの長歌であることです。この「万葉集」の作歌の中心人物である柿本人麻呂は持統朝の宮廷歌人です。そして磐姫皇后・八田皇女と

聖徳太子の作とされているこれらの歌は、持統朝の歌人の仮託歌であろうと言うのが有力です。

また、雄略天皇の御歌は、若い女性に名を問う形式の歌で、それによって婚姻を求めるものです。求婚歌と呼ばれます。舒明天皇の御歌は、大和にある天香山に登って、自らが統治している国土を見渡して、「ああ、大和はよい国だ！」と、その感慨を述べたもので、国見歌と呼ばれる歌です。これらの御歌の形式は、古くから伝わるものと考えられて、この二つの御歌も、このお二人の作であるとは考えられておりません。恐らく宮廷の儀式で口誦され唱えられていた歌であらうと言われます。その声に出して唱えられていた歌を、文字に書き留めたのが、お二人の御製歌として、「万葉集」の冒頭に掲げられたものと考えられています。

この集冒頭の二つの歌と、その後の歌との形式上の相違は、どんなところからやって来たのでしょうか。このことが、その後の、現在に至るまでのわが国の文字表記の変遷を、強く規定して来たに違いないと思われま

「万葉集」の歌の中で最も古い歌は何か、という問いは、誠に難解なものようです。雄略御製・舒明御製として掲げられた冒頭の二つの御歌に一つのラインを引いて、つまり舒明御製を舒明天皇の没した六四一年として考えて、そこから「万葉集」の歌歌が編まれた年月までの間に、間違いなく急激な文学としての変化が起こっていたということが言えるはずで、この変化がなければ、文字言語としての「万葉集」はなかったのではないか、誰がこのようなものを編もうと考えたのか、誠に興味を惹かれるところですが。

勿論「万葉集」は、大伴家持を中心とした編者が編んだに違いありませんが、その元となった資料は、つまり日本語の歌を文字に書き留めた人は誰で、どのような経緯でそのようなことを試みるようになったのか、非常に関心を惹かれるところです。

七世紀前半までの文章は、全て漢文だったと言われるます。まとまって残っているものは残念ながらもありませんが、エリートである宮廷の官僚は、完璧な漢文を読み書きしていたと言われます。

しかしながら「万葉集」では、歌の部分に限られま

すが、わが国の言語・日本語が、表記されています。

しかも五・七・五・七の韻律の長歌、五・七・五・七の歌が、作られているのです。これは極めて驚くべきことのように思われてなりません。

もう一つ、漢文しかなかったはずの「万葉集」以前に、これも間違いなく存在したのが漢字の訓読です。一体これはどのようにして出来上がったのか、大きな謎と言わざるを得ません。この訓読に関しては、「万葉集」に至るまでには、何の資料も残っていないといえるのが、私どもの知り得るところですが、「万葉集」では、その訓読が、しっかりと使いこなされています。それどころか、掛詞や枕詞が縦横に駆使されて、現代人の私どもを揺り動かすような表現が満載されているのです。

言うまでもなく当時にはカナ文字はありませんでした。そんな中で、本当に訓読がどのようになされていたのか、その手がかりはないか、集を見回してみました。

【略体表記の人麻呂歌】

一二四七

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らくし

よしも

大穴道（おほなむち） 少御神（すくなみかみの）

作（つくらしし） 妹勢能山（いもせのやまを）

見吉（みらくしよしも）

一二四八

吾妹子 見偲 奥藻 花開在 我告与

我妹子と 見つつ偲はむ 沖つ藻の 花咲きたらば

我れに告げこそ

吾妹子（わぎもこと） 見偲（みつつしのはむ）

奥藻（おきつもの） 花開在（はなさきたらば） 我

告与（われにつげこそ）

一二四九

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉

君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし袖
濡れにけるかも

君為 (きみがため) 浮沼池 (うきぬのいけの)

菱採 (ひしつむと) 我染袖 (わがそめしそで) 沾

在哉 (ぬれにけるかも)

一二五〇

妹為 菅實採 行吾 山路惑 此日暮

妹がため 菅の実摘みに 行きし我れ 山道に惑ひ
この日暮しつ

妹為 (いもがため) 菅實採 (すがのみつみに)

行吾 (ゆきしわれ) 山路惑 (やまぢにまとひ) 此
日暮 (このひくらしつ)

以上は柿本人麻呂の略体表記の作です。一見すると
ほとんど漢詩文のようです。現在ではこれを読み下し
て、五・七・五・七・七の韻律の短歌として読んでい

ます。

しかしこれをこのように短歌として読むには、最低
二つの条件が必要に思われます。それが漢字の訓読と
カナ文字の存在です。

現在では漢文の訓読は、訓点と呼ばれる左側の返り
点と、右側のカタカナによる送りがなを付すことで成
立しています。更に漢字にひらがなのルビを付けられ
ば、ほぼ日本語文として読み下すことができます。現
在ではカナ文字の存在によって、訓読が保障されてい
るからです。

人麻呂の時代はどうだったのでしょうか。

カナ文字が作られる以前に漢字の訓読が成立してい
た、しかも漢文しかない時代に。多分長い年月をかけ
て、漢字の訓読が試みられ、そのおおよその枠組みが
出来上がっていた、そうして「万葉集」の時代が訪れ
た、こんな風に考えてよいのか、しかし舒明御製とさ
れるような御歌と、その後の歌との相違を見ると、そ
の変化がどのようなにしてもたらされたのか、それを実
行した人麻呂やその周辺の歌人が何を目指し、何を成
し遂げたのか、興味は尽きません。

点字から識字までの距離(一一八)

通所支援事業所へのサービス(八)

山内 薫

三年ぶりのりまでのお話し会と

リライトの試み

二〇一九年七月三一日にりまを訪問して以降、二〇二〇年に入ると新型コロナウイルス感染拡大のために、りまをはじめとする施設でのお話し会等の行事はすべて中止に追い込まれ、全く活動ができなくなりました。その間、図書館では何回かリモートによるお話し会を行ったようだが、直接顔を合わせず、一方的に絵本の読み聞かせや紙芝居などを映像で届けても、子どもたちの反応が見えず、苦勞したようである。

二〇二二年になって、ようやくコロナも収まりかけ、少しずつ図書館でのお話し会なども再開するようになってきた。そんな折にりまからお話し会の要請が

あった。

以前からおられるIさんが所長になられ、次のような希望を寄せられた。

「内容や本の程度の希望はないが、入所児童は全く会話のできない重症の子どもたちなので『視覚に訴える大きなもの、色の鮮やかなものが良い』とのことで、今後は二ヶ月に一度くらい実施して欲しい。ただしコロナの状況もあり、決定ではない」とのことだった。

打ち合わせの結果八月一八日の木曜日に訪問日が決まった。内容については、近くの緑図書館の担当者が実施案を作成し、当日二時にりまに集合、打ち合わせの後、二時半から三〇分のお話し会を行うことになった。事前の連絡では、小学生四名と中学生二名が参加予定で、一人の中学生は絵本が好きな方とのことだったので、以前からやってみたいと思っていた「注文の多い料理店」の紙芝居をやさしく、短くリライトして実施することにした。また重症の子どもたちということだったので、以前行って好評だった替え歌の「ねばらねばなつとう」もやることにした。

図書館側の参加者は担当の緑図書館から三名、ひき

ふね図書館から二名、いつも図書館のお話し会や外で児童館のお話し会に協力して下さっているくさぶえというグループのSさん、そして私の七名が参加することになった。

緑図書館の作成したお話し会実施案は以下の通り。

①司会 はじめのあいさつ 緑図書館 I

②実施項目

大型絵本 へんしんとネル Sさん

紙芝居 注文の多い料理店 山内さん

絵本 ねばらねばなつとう 山内さん

歌とペープサート すうじの一はなあに 緑図書館 O

音楽に合わせて振るシャカシャカマラカスの配布と

模造紙に書いた歌詞の提示 緑図書館 K

音響係 緑図書館 I

おわりのことば 緑図書館 I

③持参するもの

大型絵本台

紙芝居舞台

ペープサート、シャカシャカ 歌詞

その他、感染症対策としてマスクの着用、検温、消

毒、手洗いうがい（フェイスマスクは不要）

当日ひきふね図書館組は一時に図書館に集合して自転車で行まに向かった。二時前にりまに到着、緑図書館の人たちと打ち合わせ、ペープサート「すうじの一はなあに」の歌の練習をする。

残念ながら絵本が好きだという中学生はお休みとのこと、小学五年生、六年生、中学生の三名が参加してくれた。

はじめにSさんが大型絵本の『へんしんオバケ』（あきやまだし作・絵金の星社 二〇〇六）を読んだ。

予定では『へんしんとネル』（二〇〇二）だったが、急遽『へんしんオバケ』に変更にな



写真1 へんしんオバケ

った。あきやまただしのへんしんシリーズはとても人
気のあるシリーズで第一作の『へんしんトンネル』以
来、今年九月に刊行された『へんしんロボット』ま
で、現在まで二二作も刊行されている。
第一作『へんしんトンネル』の最初は次のような内
容。

一ページ目

「ふしぎな トンネルが ありました。

そのなも へんしんトンネル。

この トンネルを くぐると、

なぜか へんしんしちやうんです。」

二ページ目「あるとき カツパが

『かっぱ かっぱ かっぱ………』

と つぶやきながら

トンネルを くぐると」

この見開きページにはカツパがへんしんトンネルに入
っていく絵と

大きな文字で「かっぱ かっぱ かっぱ かっぱ か

っぱ かっぱ かっぱ かっぱ………」

と画面一杯の描かれている。

そして次ページを開くと

トンネルの出口から馬が出てくる絵と大きな文字で

「ばかっぱかっぱかっぱかっ」と描かれ

「げんきな うまに なって、 でてきちやいまし

た。」

次は「とけい」が「けいと」に、つぎは「ぼたん」が

「たんぼ」というように、ある言葉を繰り返し唱え

ると違うものに変身するというのがこのシリーズ共通

の内容となっている。

当日読んだ『へんしんオバケ』では、「あるところ

に こわーい こわーいどうくつが ありました。そ

のなも オバケどうくつ。この どうくつを くぐり

ぬけるとなぜか オバケに へんしんしちやうんで

す。」と始 まり、

「たいほう たいほう たいほう たいほう………」

と唱えながら大砲の頭をした人が洞穴をくぐると

「ほうたい ほうたい ほうたい………」と包帯を

ぐるぐる巻きにしたミイラになって出てきたり。竹の

体をした不思議な生き物が「タケ タケ タケ タケ

………」と震えながらも洞窟を潜り抜けると、ガイ

コツが「ケタ ケタ ケタ……」と高笑いしながら出てくる。

別の場面では、おしゃれなヤギが「ヤギー ヤギー……」と言いながら洞穴をくぐると「ぎやーっ」と四つ目、四つ角、体が蛇のおかしなオバケに変身している。

児童図書館研究会が静岡県の特設支援学校二〇校にアンケートを行った結果、子どもたちに人気のある絵本のダントツトップがこのシリーズで、半数近くの学校から名前が挙がっていた。

りまの子どもたちも笑いながらこの絵本を楽しんでいた。

次は紙芝居の予定だったが、急遽替え歌紙芝居「ねばらねばなっとう」に変更。これは以前も好評だったが、今回も「なっとう なっとう なっとなっとなっとう」の部分では一緒に手をたたいて見てくれた。

そしていよいよライト版の紙芝居『注文の多い料理店』を行った。

堀尾青史脚本、北田卓史画、童心社刊の『注文の多い料理店』の紙芝居は、かみしばい宮沢賢治童話名作

選の中の一巻として一九六六年に刊

行され、全七巻のこのシリーズが第五回五山賞を受賞している。五山賞

は、教育紙芝居の生みの親、高橋五山の業績を記念して一九六二年に設

けられた賞で、一年間に出版された

紙芝居の中から最も優秀な作品に授与される賞で、現在まで続く由緒ある賞である。ちなみに二〇二〇年の第五九回の五山賞は『三月十日のやくそく』（作・早乙女勝元 絵・伊藤秀男）が受賞している。古くから紙芝居と言えば「五山賞」といわれ、紙芝居の芥川賞

などとも呼ばれている。

最近『注文の多い料理店』の新たな紙芝居（宮沢賢治原作 諸橋精光脚本・絵 鈴木出版 二〇一九）



写真2 ねばらねばなっとう

が、鈴木出版から出版されたが、こちらは二二枚と童心社版の一六枚よりも多く、通して読むと十五分くらいかかってしまうので、易しく読みやすく短くリライトするには童心社版が良いと考えた。童心社版は久しく品切れ、重版未定となっていて、二〇一一年に野馬追文庫の一冊として南相馬に送る一冊として選定したにもかかわらず送れなかった経緯がある。また、この童心社版については、随分前に図書館が廃棄処分した

ものを入手したので、リライトした文章を印刷して紙芝居の絵の裏の文章の面に貼り付けることができた。童心社版もゆっくりに読むと十二分くらいかかるので、できれば五分程度に短縮して読めたらとリライトを行



写真3 童心社版紙芝居注文の多い料理店

った。

第一場面の紙芝居の文は

「山の中は、風がどうどうふき、草はざわざわ、木はごとんごとんなっていました。／東京からきた、てっぽううちのふたりのしんしは、山おくでみちにまよい、あんない人も犬もどっかへいつてしまいい、がっかりしながら、みちをさがしていました。」／「ぬきながらー／（Aジャンパー）『いったい ぜんたい けしからん。／とりもけものもぜんぜんいない。』となつている。」

リライト版の文は

「東京からきたふたりのてっぽううちのしんしは、やまのなかでみちにまよってしまいました。『ぜんたい、ここの山はけしからん。とりもけものも一匹もいやがらん』／きがつくとあんない人も犬もどこかに消えていきました。」

宮沢賢治の擬音はとても重要だが、リライト版紙芝居のはじめに持つてくるのはどうかと考えた。紳士の言葉は原文に近い表現とした。

第二場面は

「ジャンパーのしんしがこぼしました。(Bオーバー) 『あんない人も犬も、どこへいつちまったんだろ。かえりみちもわからんぜ。それにぼくははらペコだよ。』／ふとった青いオーバーのしんしもこぼしました。／(Aジャンパー) 『ぼくだってそうだ。さむいしはらはすくし、はやく山をおりたいよ。えもののないのはシヤクだが、きのうのやどやで、きじでもかってごまかそう。』／(B) 『そうだな。いやあ、ぼくははらがすいた。ペコペコだ。』／(A) 『ぼくもだ。はらのむしがきゆうきゆうなくよ。なんかたべたいなあ。』／ざわざわざわざわ、はげしく風がふいて、木がゆれました。／—はやくぬく—／(B) 『あれ、あんないえがあるぜ。』

リライト版の文

「かえりみちもわからんぜ。はらがへったなあ」「ぼくだっておなががペコペコだ。なんかたべたいなあ。」／ざわざわざわ風がふいて木がゆれました。『あれ、おおきないえがあるよ。』—

以下は第三場面のリライト分のみ。

『ほんとうだ。レストランだ。』／『せいよう料理店山ねこけんてかいてある。』／『こんな山の中でも、

ひらけてるんだ。』／『早く行って、なにかたべよう。おなががすいて、たおれそうだよ。』／ふたりはよろこんで、山ねこけんのげんかんにたちました。

第四場面

『いやーきみ、りっぱなレストランだね。ぼくたちにびつたりだ。』／するとポンポンポンとチャイムがなって、こえがしました。『どなたもどうかおはいりください。けっしてごえんりよはありません。』

『それじゃあえんりよなく、はいろう、はいろう。』

原本では扉に文字が書いてあつて、それを二人が読むという設定だが、この紙芝居ではスピーカーから声が聞こえてくると言う設定に変えてある。(ちなみに鈴木出版の紙芝居では原本通り扉に文字が書かれている)



写真4 数字の歌

この物語の中では、この扉の文字（童心社版の紙芝居ではスピーカーからの声）が最も重要なキーワードとなっているので、この部分だけはリライトや省略はせずにすべて原本通りとした。紙芝居では少し変えている部分もあり最初の声は「えんりよはありません」が「えんりよはいりません」に変えてある。

このようにして今回のリライト版では、本文は短くリライトし扉の言葉の部分は原本そのまままで展開していく。

最終十六場面の紙芝居の文

「ふたりの しんしは、すっかりしよげて、ふもとの いしやじょうへいそぎます。／山からどうとふきおろす風が、かみくずのようなしんしをおいはらいました。／村の子どもたちが、だまってこれを見ていました。」と終わる。

リライト版の文

「ふたりのしんしは、しよんぼりとしてえきにむかいました。東京にかえってもふたりのかおは、まるで紙くずのようにくしゃくしゃになったままで、おふろにはいってももうもとのとおりになおりませんでした。」

最後の場面の絵は線路と駅が上に描かれ、畑や山の間の道を二人の紳士と二匹の犬が駅に向かつてうつむきながら歩いている様子が描かれている。これは原本にはない情景だが、一応この場面の絵に合わせてリライトも行ってみた。最後の一文は原本の最後をそのまま引用することにした。

このようなりライトによつて紙芝居の時間はほぼ半分以下に短くなった。

今回やさしく書き直すりライトを初めて試みたが、肝心の対象と考えていた絵本の好きな中学生が休みだったので、三人の参加者には少し難しかったのではないかと思う。それでもよく聞いてくれていた。短く分かりやすくするということだけではなく、なるべく原本の言葉を忠実に取り込むことを心掛けた。今後も重度の子どもたちには少し長く感じられたり、難しい言葉や表現がある作品について積極的にりライトを試みていけたらと考えている。

最後は緑図書館が用意してきた歌とペープサートの「すうじの一はなあに」（数字の歌）。紙コップを貼り合わせたり、小さなプラスチックのボトルの中にビーズなどを入れて、振ると音の出るシャカシャカマ

ラカスを子どもたちに渡して、歌に合わせて振ってもらう。ペープサートにはそれぞれ数字が表に書いてあり、裏は「工場の煙突、小池のガチョウ、赤ちゃんのお耳、かかしの弓矢、おうちの鍵、タヌキのお腹、壊れたラッパ、棚のダルマ、オタマジャクシ、煙突とお月さま」の絵がそれぞれ描いてあり、「すうじの一本あに」で表、「工場の煙突」で裏返して絵を見せる。歌詞をかいた模造紙を広げて子どもたちにも見てもらって一緒に歌ってもらおう。歌は子どもたちがとても喜んでくれるので、プログラムの中には必ず何曲かの歌を入れる必要があると思う。

今回は三人と少なかったが、その分一人ひとりが集中して楽しんでくれたように思う。

その後はじめは二ヶ月毎にという話であったが、コロナのこともあってりまの受け入れ体勢が整わず、年末も押し詰まった十二月二十六日に二回目のお話し会を行った。（私は仕事の関係で同行できなかった）

今後機会があれば紙芝居や絵本のリライトや音楽に乗せて演じるなど様々な試みを行っていききたい。

わたくしごと

木村 多恵子

『京人形』

私は子供の頃から着物を着るのが好きだった。普段は寮生活をしていたのでワンピースやスカートを着る、真冬の寒い時期は、母が臙脂色のコールテン（コールドロイ）で縫ってくれたズボンをはいていた。大好きな着物を着られるのは我が家だけであったからなおのこと絶えず家に帰りがたかった。

学院側から春、夏、冬の休みの始まる日が発表されると、家へ帰れる嬉しさで指折り数えて、その日を待った。ただ、私の周りには「我が家へ帰れない」「我が家がない」人が何人かいるのを知っていたので公然とその喜びを表すことはできなかった。少なくとも私から友達にこの話題を口にするのは避けていた。なのに心は正直にその日を待ちわびていた。



春休み、夏休み、冬休みに家に帰れると、翌日は学院へ戻るといふ日の前日までほぼ毎日のように家の雑巾がけを終わらせてからお気に入り着物を着ていた。

小学生の頃は、夏は絹、冬はメリンスや銘仙を着、これもお気に入り朱鷺色のふんわり柔らかかな兵児帯を、締める前に頬に当ててその生地はやさしさを味わってから締めていた。篠絹（ふじぎぬ）の羽織もだーいすきだった。

母は、着物好きの私のために寮の大半の人がパジャマを夜着にしているのを知っていたが、冬の寝巻はネールの反物を買って寝巻用に縫い、日中に着る着物の袂よりは小さめの袂を付けてくれた。

夏の寝巻も本当は浴衣地を用意したかったに相違ないが、これは母の工夫で毎年いただく年賀用の日本手ぬぐいを丹念に蓄えておいて、それを使って夏の寝巻を縫ってくれた。母の一番の苦労はお年賀用の手ぬぐいであるから、それぞれの柄は当然バラバラで二本と

同じものはなかったことである。ごくたまに二本包みのお年賀があると母は「ほーっ」と大きく息をついていた。母は我が家がお配りする年賀用の手ぬぐいから二本取っておいてそれで両の袂を縫ってくれたのである。なにしろいただいた手ぬぐいには店名や店主の名前が文字の大きさも色もバラバラ、中には柄の中に名前を染め込まれていたりして、どういう配置で浴衣を縫えばよいかわからない。柄合わせは全くの素人の母には手に負えないようだった。いっそのこと染め抜かれた文字の部分は切り取って、バラバラの大きさになった手ぬぐいを浴衣地のようにぎつとつなぎ合わせることでやっていった。しかしこれは大変な苦労というより無駄になることを考えて手ぬぐいの配置を工夫していた。ところが私には柄の意味も文字もわからずただ赤、青、黄色、緑などの色がきれいに見えて喜んだ。母は私が「きれい！」というのを聞いて意を決してそのまま日本手ぬぐいを浴衣地のようにつなぎ合わせてから夏用の寝巻に拵えたのである。

寮での私の着物生活はこれでおおよそ満足していた。
た。

最初襦袢から着せてもらっていた私も一人で兵児帯
までは結べるようになり、反幅帯や名古屋帯も一人で
結び、文庫、貝ノ口、矢ノ口と覚え、名古屋帯でお太
鼓を結べるようになった。

こうして着物を着てからの私の一人遊びは60センチ
はある袂を振りながら、座敷の中を歌いながら踊り歩
くことであった。

当時、流行っていた『京人形』を歌っていた。

1. 赤い鹿の子のお振袖

京人形の見る夢は

鴨川原（かものかわら）のさざれ石

買われたあの日の飾り窓

2. 春の日永にうとうと

京人形の見る夢は

月の金閣東山

別れたあの日のお友達

3. ここはお江戸の日本橋

京人形の見る夢は

汽車に揺られて東海道

眺めたあの日の富士の山

（作詞…久保田争二、作曲…佐々木すぐる）

なんとも不思議な歌詞で私には理解できなかった。
しかし哀愁だけは感じられた。

歌詞からあふれ出る哀しさはあっても歌そのものは
純粹に美しかった。この歌がだんだん私の心を圧迫す
るようになった。なぜ？それはこの歌の歌詞に原因が
ある。多分この歌は昭和初期から戦後に至る日本の貧
しさゆえの女性のたどった哀しい運命を歌っていたの
だろう。

いつの間にかこの歌は歌えなくなっていた。

2023年1月9日

江戸時代の女性漢詩人（二）

無題

梁川紅蘭 やながわこうらん

階前 栽芍薬

堂後 蒔当帰

一花 還一草

情緒 兩依依

（紅蘭小集）

ツナガラ

タリ

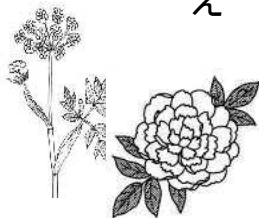
※漢文の読みと訳文等は、大修館書店『漢文名作選（第2集）』5 日本の漢詩文』によります。（読み下し文は現代仮名遣いとします）

階前には芍薬を栽え

堂後には当帰を蒔う

一花 還了一草

情緒 兩つながら依依たり

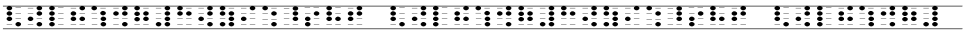


庭の踏石の前には芍薬を植え、座敷の裏には当帰を植えた。それらひとつひとつの花や草を見てみると、それぞれにめんめんたる思慕の情がつのる。

芍薬しやくやくⅡ『詩経』に、男女が愛情を契ちぎる時、芍薬の花を贈る詩がある。

当帰とうきⅡセリ科の多年草。初夏に白い花をつける。「当まさに帰るべし」の意がこめられている。

新婚早々の紅蘭を残して旅に出た夫を待ちわびて作った詩。



無 題



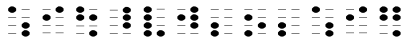
梁 川 紅 蘭



階 前 ニハ 栽 エ 芍 薬 ヲ



堂 後 ニハ 蒔 ウ 当 帰 ヲ



一 花 還 タ 一 草



情 緒 両 ツナ ガラ 依 依 タリ

やながわこうらん

梁川紅蘭 1804年（文化元年）～1879年（明治12年）
幕末維新の女流漢詩人。画家としても知られる。

美濃（岐阜県）の人。名は景（けい）。再従兄弟の梁川星巖またいとこ やながわせいがんから詩作の指導を受け、文政3（1820）年17歳で星巖に嫁す。

結婚後、新妻を残して旅に出た星巖は、足かけ3年の後帰宅するが、その間に紅蘭は『三体詩』（宋代に編集された唐代漢詩集）をすべて暗唱していた。

その後、二人は旅をともにし各地で漢詩人らと交流を重ねる。

勤皇の志士達とも関わりをもった星巖は、安政の大獄で捕縛される直前にコレラにかかり死亡。妻の紅蘭が捕らえられたがのち出獄し、晩年は京都で私塾を開いて子女の教育にあたった。

詩集に『紅蘭小集』がある。

星巖34歳、紅蘭19歳。郷里の曾根村を旅立つ二人の像。（大垣市曾根城公園）



一 本誌・本号の発行の遅れについて

本誌・機関誌『うか』は、季刊での発行を期していましたが、四年目に入りました新型コロナウイルスのパンデミック（WHOではほぼ終結したとの観測が示されていますが）によって、発行に関わる諸作業に支障を来すことになって、この一月に発行する予定でありました今号が、今月まで延びることとなりました。誠に残念ですし、ご支援を賜っております皆様に、失礼至極の事態となつてしまいました。

謝してお詫び申し上げます。

今後ともどうぞよろしくお見守り下さいますようお願い申し上げます。

二 賛助会費のご納入

大変ありがとうございました

二〇二二年度も、多額の賛助会費を頂戴致しました。ご納入いただきました皆様のご芳名は、左の通り

です。

雨宮絢子様	北村勝三郎様	政井宗夫様
武田幸太郎様	村田忠禧様	岡 稲子様
田崎吾郎様	河村美智子様	大滝正雄様
関口常正様	清水静雄様	木原純子様

厚く御礼申し上げます。謹んで有効に使用させていただきます。

三 『古事記』の漢点字版

横浜市中央図書館への、二〇二二年度の納入分として、『古事記』（次田真幸訳注、講談社文庫）全三巻のうち、上・中の二巻（七分冊）を完成し、図書館に納入致しました。

『古事記』は言うまでもなく、『萬葉集』・『日本書紀』と並ぶ、わが国の最も古い文献です。昨年度まで『万葉集』と格闘して参りましたが、これで、わが国の最も初期の文献のうち二つを、二〇二三年度のう

ちに完成できる見通しとなりました。

言葉に尽くせないものがあります。

会員の皆様の、並並ならぬ努力の積み重ねの賜と、心に沁みる思いでございます。深く御礼申し上げます。

四 厚生労働大臣表彰

横浜市社会福祉協議会のご推薦をいただきまして、二〇二二年度の、厚生労働大臣表彰をいただきました。

本会の活動も、四半世紀を超えました。長きに渡って活動をして下さいます会員の皆様にとつて、このことは一つのメルクマールとして誇っていただいでよいものと存じます。

また今回の受賞は横浜の活動へのもものではございませんが、一緒に活動して下さっている東京の会員へも送られたものと受け止めてよいものと存じます。皆様の活動によって、これからの視覚障害者に、不朽の資料が残されることになりました。

深く御礼申し上げます。

五 『常用字解』の音訳版

ほぼ一年以前に、『常用字解』（白川静著、平凡社）の音訳版が完成して、サピエ図書館にアップされました。そのニュースが同年一〇月一八日づけの『点字毎日』に、掲載されました。

『常用字解』は漢点字版を完成して、そこで得たノウハウを生かすことができれば、音訳版も夢ではないと考えて取り組みました。

デジタルのデータですので、劣化はしません。後世のご批判をいただければ幸甚に存じます。

『常用字解』の漢点字版への取り組みは、この音訳版に多大な恵みをもたらしましたが、そればかりでなく、それ以降の本会の活動、『萬葉集』『古事記』『岩波古語辞典』への取り組みにも、ノウハウと自信をもたらしました。これらの活動が、後世の視覚障害者の皆様への贈り物となりますことを祈って止みません。

編集後記

▼新型コロナウイルスの扱いが2類から5類に変更になり、ほとととした感じですが。この3年間、本誌の発行はほぼ年に2回の発行にとどまりました。これからは何とか正常な状態での発行が可能になるのではないかと期待されます▼振り返ってみますと、本誌が創刊されたのは1997年4月で、最初は隔月刊でした。編集を担当されたのは宗助悦子さんという方で、18号分の編集を担当されました。その後平野桃子さんと宇田川幸子さんに引き継がれ、2006年4月から筆者が担当することになり、現在に至っていますが、筆者は既に90歳を迎えています。いつまでもこの作業を続けていけるか分かりませんが、若い元気な方にこの仕事を引き受けてもらえないかと考え、宮澤義文さんに後任をお願いすることになりました。なにとぞよろしくお願ひします▼本誌の顔ともいえるべき表紙絵は岡稲子さんが、2000年8月からずっと23年間、毎回オリジナルのイラストをご提供くださっています。本当にありがとうございます。

木下 和久

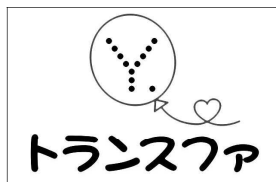
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2023年7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。